

漢法苞徳塾資料	No. 137
区分	論説・刺絡問題懇話会会報
タイトル	刺絡に関わる難經の記述
著者	八木素萌
作成日	1989.12

1. 前言

刺絡は非常に劇的な効果を発揮できる鍼療法であること、そして鍼灸術の極めて重要な構成部分であること、その手技方法は到底『外科手術』などと言えるような代物では無いし『外科手術』の代用となり得るものでも無いこと、これらの事は「刺絡」を知っている者には極めて当り前の事である。

『素問』調經論第 62 は「微鍼」による「調經」を記述しているのであるが、

- ・「神有余」＜心蔵神＞→「小絡之血」
- ・「血有余」＜肝蔵血＞→「留血＝盛經之血＝血絡」
- ・「志有余」＜腎蔵志＞→「然筋血」（＊註＊然谷穴の辺りの血絡）

を刺して血を出す事を指示している。

『靈樞』血絡論第 39 では「奇邪而不在經」ものが「血絡」であると規定しているが、これらを刺して出血した場合の種々の反応の病理的生理的な意味を記述して誤治をしない為の注意を行なっている、そして「陰陽相得テ合シテ痺ヲ為ス者ハ 此レ内ニ經ヨリ溢レテ 外ニ絡ニ注グナリ 是ノ如キ者ハ陰陽俱ニ有余ニシテ 出血多シト雖ドモ 虚ス能ウナキナリ」と述べたのちに絡の具体的な態様を描写して「～之レヲ瀉シテ万全ナリ～」と言っている。

『靈樞』小鍼解第 3 に「～宛陳ナレバ之レヲ除クトハ 血脈ヲ去ルナリ～」とも在る。これ等のほかにも『素問』にも『靈樞』にも諸々の篇に「刺絡」に関する記述が見られる、そして多くの場合その絡に関連する「奇邪」の病証が記述されている。これは刺絡が鍼灸術の極めて重要な構成部分である事を示している。

鍼灸術の重要古典である『難經』は主に鍼の治療・刺法の体系を確立したものと言えると思う、特に記述されていないが「毫鍼」刺法を述べていると解釈されて来たと言えよう。然し刺絡に関する記述も見えるので、それを検討して見たい。

2. 難經鍼治原理

「～調氣ノ方ハ必ズ陰陽ニ在リトハ其ノ内外表裏ヲ知リテ其ノ陰陽ニ随ヒテ之レヲ調ノウ、故ニ調氣ノ方ハ必ズ陰陽ニ在リト曰フナリ」（7 2 難）、「～榮衛ノ通行此レ其ノ要ナリ」（7 6 難）、「～氣ヲ得ザレバ男ハ外ニ女ハ内ニ与ウ 氣ヲ得ザレバ是レ十死ノ不治ト為スナリ」（7 8 難）と言う、また 7 0 難では「氣」が「陽ニ在ル」「春夏」には「一陰ヲ致」し、「氣」が「陰ニ在ル」「秋冬」に

は「一陽ヲ致」すように刺すべき事を述べている。その他の記述から見ても『難経』の「刺法」論は、鍼治の要諦は「陰陽」の調和であり「榮衛ノ通行」であると言う思想で一貫しているのであり、「陰陽ノ調和」を以て「度合い」とする事を主張しているのである。『難経』的には「刺絡」もこの原則に従って把えるべきものと解されよう。「刺絡」に関連する記述と考えられるものには、『素問』や『靈枢』の記述の様な具体的な病証論は見えない。この事は『難経』に「経脈病証」論の記述が見られない事と恐らく関係が在るのであろう。「砭ニ之レヲ射スナリ」と明確に指示している処は、28難のみである。奇経については、29難に病証が記述されているが、『難経』の病証論記述は、これと臟腑病証の記述のみであるから、そして「血絡」「浮絡」などと言う記述は無いのであるから、「経脈病証」の記述が無いことと並んで大きな謎と言えらる。この謎は『難経』成立時期の医学的状況の研究と『難経』全体の記述の分析とによって推測する他はないものと言えよう。これは又「絡」論の変化および整理過程の研究とも関連するであろう。

3. 『難経』の経脈論との関係

「～邪六腑ニ在ルトキハ陽脈和セズ 陽脈和セザルトキハ氣之レニ留マル 氣之レニ留マルトキハ陽脈盛ンナリ 邪五臟ニ在ルトキハ陰脈和セズ 陰脈和セザルトキハ血之レニ留マル 血之レニ留マルトキハ陰脈盛ンナリ～」(37難中段)、

「～五臟和セザルトキハ九竅通ゼズ 六腑和セザルトキハ留結シテ癰ヲ為ス～」(37難上段)、

「～夫レ氣ノ行グル所ナリ 水ノ流レノ息ムコトヲ得ザルガ如キナリ 故ニ陰脈ハ五臟ヲ榮シ 陽脈ハ六腑ヲ榮シテ 環ノ端無キガ如ク 其ノ紀ハ知ルコトナク 終リテマタ始マル 其レ覆溢セザレバ人氣ハ内ニハ臟腑ヲ温メ外ニハ腠理ヲ濡ホス」(37難下段)、

「～経脈ハ血氣ヲ行グラシ陰陽ヲ通ジテ以テ身ヲ榮スル者ナリ～」(23難)、

「～別絡十五ハ皆其ノ原ニ因リテ環ノ端無キガ如ク転相シ灌溉シテ寸口人迎ニ朝フ～」(23難)、

これ等の他に八難では経脈は「十二経ノ原」「腎間ノ動氣」＝「五臟六腑ノ本」「十二経ノ根」に繋っており或は根ざしている事を述べ、24難では

「～足少陰～少陰ハ冬脈ナリ伏行シテ骨髓ヲ温ム～、～足太陰～脈營セザルトキハ肌肉滑沢ナラズ～、～足厥陰～厥陰ハ肝脈ナリ肝ハ筋ノ合ナリ筋ハ陰器ニ聚マリテ舌本ニ絡フ～、～手太陰～太陰ハ氣ヲ行グラシテ皮毛ヲ温ムル者ナリ～、～手少陰～脈通ジザレバ血流レズ～」(24難)

の様に経脈の臟腑との繋りと基本的生理機能を記述して、絶証（死に臨んでいる症状型）の根拠を示している。これ等の記述は何れも経脈の生理的機能の枢要点を描出しているが、診断と治療の関係の角度から論じているものとしては、23難・24難の終始を論じているところと、37難の邪が陽<腑>に在るときには「癰」となる～体表部で経氣が鬱滞して病証を形成している～が、邪が陰<臟>に在るときには九竅～五臟が健常であれば五臟機能の外候として良好に機能する～が塞がると言う認識を記述し、更に引き続いて「邪」が六腑に在るときには陽経脈が不和を来たす、すると「氣」が其処に滞留することになって「盛」<実>となる、このときには陽の脈状にもそれが反映され脈拍においても陽性の脈状が「盛」<実>を表現することになる。また「邪」が五臟に在

れば陰経脈が不和を来たす、すると其処には「血」が鬱滞する事になるから陰経脈が「盛」＜実＞となり脈状にもそれが反映される、と言う認識を記述し説明しているのである。これは虚実論の敷衍であると言えるものである、つまり「虚」とは正気の「虚」で「実」とは「邪実」であって「気・血」の鬱滞であると言う論である。この様な病態論的な経脈論は、28難の

「～聖人溝渠ヲ図リ設クルニ比シ 溝渠ハ満溢シテ深湖ニ入ル 故ニ聖人モ拘通スルコト能ワズ 而シテ人脈ノ隆盛スレバ八脈ニ入りテ環周セズ 故ニ十二経モ拘ワルコト能ワズ 其レ邪気ヲ受ケテ蓄スレバ腫熱ス 砭ニ之レヲ射スモノナリ」

と言う記述と呼応し合っているものと言えよう。「邪気ヲ受ケテ蓄スレバ腫熱ス」と37難の「六腑和セザルトキハ留結シテ癰ヲ為ス」とは明らかに対応し呼応していると考えられる。「砭」とは「鍼」＝「鋒鍼」＝「三稜鍼」のことであり、「射」とは「飛び出す」ことである、正に「刺絡」であり「瀉血」を記述しているのである。

以上

1989.12 述